愛媛大学教育学部保健体育紀要第5号：41-45，2006

総合型地域スポーツクラブの必要性

堺　賢治[1)]

The necesary of comprehensive community sports clubs

Kenji Sakai[1]

Key words :comprehensive community sports clubs, community building

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education, Ehime University, 5, 41-45, March , 2006)

キーワード：総合型地域スポーツクラブ，コミュニティ形成

Ⅰ　はじめに

今，日本は危機を迎えている．1990年代に始まったといわれる失われた10年という経済不況によって，高度経済成長期に確立された終身雇用制や年功序列制に代表される日本型システムが崩壊し，アメリカ型の競争社会になりつつある．それに伴って，勝ち組と負け組に分かれ，階層社会が形成されつつある．このような状況の中，日本は少子高齢化社会を迎えようとしている．少子化に伴う働く人々の減少，若者のニート化などは経済的基盤の弱体化であり，将来に不安を残している．また，国債に頼りきった国家財政は多くの負債を残し，今後その負債を解消するために小さな政府を目指そうとしている．その結果，人々は医療費の値上げ，年金の減額などをひかえて，将来が不安だから金を使わない．そのためなかなか経済不況から脱出できない状況にある．

また，日本は高度経済成長後，豊かさが地域共同体の必要性をなくしてしまった．町では小売店がなくなり，スーパーマーケットやコンビニエンスショップが繁盛し，会話がなくても買い物のできる状況にある．さらに，この地域共同体の崩壊は教育界に深刻な問題を引き起こしてきた．さかきばら事件に始まる種々の事件から，最近は小学生の殺人事件などが多発化し，学校は集団登校や集団下校をせざるをえない状況に追い込まれている．このような状況は地域の教育力の低下であり，将来に深刻な問題を投げかけている．

経済界，教育界に起こっているこれらの諸問題を解決するためには，地域共同体を立て直すために新しいコミュニティを創造する必要があろう．本稿では，このような社会的閉塞感を打開するための一つの糸口になると思われる総合型地域スポーツクラブを取り上げ，なぜ，総合型地域スポーツクラブが必要であるかを説明するものである．

Ⅱ　スポーツのおかれている状況

1．子どものスポーツ問題

子どもの体力・運動能力の低下が指摘されている．愛媛県の「愛媛県スポーツ振興計画」によると，20年前の小学校６年生の女の子の運動能力と，今の高校１年生の運動能力が大体同じくらいである[1)]．その原因は，体育の時間が減少したこと，少子化の影響で運動部が減ってきたこと，運動をしている子としていない子の二極化が起こっていること，などがあげられる．もっと深刻なのは，異年齢の遊び集団が崩壊したことである．遊びの三つの間（空間，時間，仲間）がなくなってきたことにより，地域での遊びが減ってきた[2)]．

1）愛媛大学教育学部
〒790-8577　愛媛県松山市文京町３番

1．*Faculty of Education, Ehime University, Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577, Japan*

その結果，子どもの直接的なコミュニケーション能力や人間関係能力が低下してきている．かわりに出てきたのが携帯電話やメールなどによる間接的なコミュニケーションによる人間関係の場面が多くなってきた．また，従来，異年齢の遊び集団によって構築されたタテ関係がなくなることによって，以前と比較して若者のリーダーシップ能力が低下してきた．このことが子どもたちの学校生活に悪い影響を与えている．

一方，遊びの減少を補うものとして出現してきたスポーツ少年団であるが，小学生に限定すれば，加入率はドイツのスポーツクラブ加入率50%に比べて16%と少ない．その上，スポーツ少年団は大人の手による運営であり，指導者の考え方によって影響を受ける．指導者が勝利至上主義になると，練習日数を増加させ，練習の過熱化をまねく．そのためスポーツ傷害を持つ子が増えたり，バーン・アウトする子が出てきている．また，単一種目しかしないスポーツ少年団が多く，早期からのスポーツ種目の決定は，本当にその種目にその子が合っているかどうか分からないままスポーツ生活を送ってしまう．さらに，大人の手による運営であるため，遊びのように子どもたちが考えてやるものではなく，リーダーの養成に悪い影響を与えている．

全国調査によれば，運動部に加入している子どもは，中学校７割，高校５割であるが[3]，少子化にともなって，子どもたちの数が減少し，クラブ数が減ってきていることや運動部離れが起こってきていることは見逃せない現象である．また，愛媛県では，小・中学校の先生に限定すれば，30歳代，40歳代が多く，20歳代，50歳代が少ないことである．10年後を考えれば，指導者の高齢化が起こり運動部が維持できなくなると思われる．さらに，広島県では，中学校の先生に「あなたは部活動を指導したいですか．」という質問に，５割以上の先生が「したくない」と回答しており[4]，先生の部活動離れも起こっている．このような状況の中で，子どもたちにスポーツ活動を保証しようとすれば，地域の外部指導者が必要になってくる．

２．地域スポーツの問題

地域スポーツの問題点としては次の四つのことがあげられる．

第一の問題は，地域スポーツ行事参加者の固定化や行事のマンネリ化があげられる[5]．例えば，校区レベルのソフトボール大会に参加している人は，バレーボール大会にも運動会にも参加し，参加していない人は何も参加していない．この理由として，校区レベルの大会は公民館分館（町内会）対抗の形式で開催される場合が多く，どうしても競争原理がはたらいてしまう．また勝利にこだわるため運動部経験者やスポーツの得意な人しか参加できにくい雰囲気がある．加えて，得点を稼ごうとするために住民に参加を強制する場合もみられる．また地域スポーツ行事を主催する公民館や運営に当たるスポーツ指導者も既存のスポーツ行事を消化することに精一杯であり，誰でも参加できる行事を新しく作ることが出来ない状況にある．

第二の問題は，スポーツクラブをめぐるものである．日本のスポーツクラブの問題点は，少人数，単一種目であることや，スポーツ施設やクラブハウスを持っていないことであり，選手を辞める時はクラブを辞める時である．また，楽しみ志向の人と勝利志向の人が出てきた場合，勝利志向の人が勝ってしまう傾向があり，ドロップアウトする人が出てきてしまう．

第三の問題は，スポーツ施設をめぐるものである．我が国のスポーツ施設は学校の体育施設と公共スポーツ施設の占める割合が高い．学校の体育施設の場合，特定のスポーツクラブが占有しており，新しいスポーツクラブが入っていけない．また，学校の体育施設は個人開放が出来ない．そのため，仕事が忙しくて，クラブに加入できない40歳代・50歳代男性の地域スポーツへの参加率が落ちてきている[6]．公共のスポーツ施設の場合は，絶対数が不足し，有効に利用されていない．また，使わしてあげるという姿勢とスポーツ施設の情報があまり流されていないことも問題である．

第四の問題は，スポーツ指導者をめぐるものである．地域スポーツの指導者が職業として成り立っていない点である．学校体育や商業スポーツの指導者は制度化されているが，地域スポーツの指導者を制度化しないと地域スポーツの発展は難しい時代にきている[7]．また，体育指導委員，スポーツ指導員，レクリエーション指導員，スポーツ少年団の指導者などの連携がないことである．加えて，スポーツは楽しむが指導者にならない若者が増えていることも問題である．

このように，地域スポーツは色々な面で危機を迎えている．今までの地域スポーツ論では対応できないとはいえ，これらの問題を解決できる新しい地域スポーツ論を展開すべき時期にきているといえる．

上記のような子どものスポーツや地域スポーツの行き詰まりを打開するために，文部科学省は2000年「スポーツ振興基本計画」を策定した．それによると，第一に，生涯スポーツ社会実現に向けた，地域におけるスポーツ環境の整備充実（総合型地域スポーツクラブの全国展開），第二に，我が国の国際競技力の総合的な向上方策（一貫指導システムの構築），第三に，生涯スポーツおよび競技スポーツと学校体育・スポーツとの連携を促進するための方策（子ども達の豊かなス

ポーツライフの実現に向けた学校と地域の連携の推進，国際競技力向上に向けた学校とスポーツ団体の連携の測深）をあげている．その中でも，生涯スポーツ普及のために総合型地域スポーツクラブの育成には力を入れている．

Ⅲ　総合型地域スポーツクラブとは

1．スポーツ振興基本計画

総合型地域スポーツクラブとは成人の週１回以上のスポーツ実施率を35%からヨーロッパの先進国なみに50%に上げるためにドイツのようなスポーツクラブを作ろうという試みである．2010年までに全国の約3000市町村に１つ以上のクラブを作ろうとするものであり，将来的には全国の約10000中学校区に全て作ろうとするものである．文部科学省によると全国783市町村で2115箇所（2005年７月時点）が設立済みか設立準備中である．

また，総合型地域スポーツクラブづくりをサポートする広域スポーツセンターを2010年までに各県に１つ以上，将来的には300作る予定である．

2．総合型地域スポーツクラブのキーワード

総合型地域スポーツクラブのキーワードは三つあげられる．

第一は，三つの多様性である．子どもから大人，さらに高齢者とつながる世代の多様性，いろいろな種目ができる種目の多様性，いろいろな競技レベルの種目があるレベルの多様性があげられる．

第二は，あるものとあるものをつなぐことである．体育指導委員，スポーツ指導員，レクリエーション指導者など指導者をつなぐこと，学校の体育施設，公共スポーツ施設，商業スポーツ施設など施設をつなぐこと，小学校，中学校，高校，大学など学校をつなぐこと，学校教育と社会教育をつなぐこと，生涯スポーツと生涯学習をつなぐこと，健常者と障害者をつなぐこと，生涯スポーツと競技スポーツをつなぐこと，スポーツと福祉や医療をつなぐことなどがあげられる．

第三は，自主運営である．日本は市町村合併によって大きな政府から小さな政府へ代わりつつあり，今まで行政がしてきたことを住民が行う必要性が出てきた．特に吸収合併された地域では行政の手が及ばないところが出てきており，自分たちの地域は自分たちで守らなければならない時代になってきた．

Ⅳ　総合型地域スポーツクラブの目指すもの

1．ライフステージに応じたスポーツ活動

ドイツのスポーツクラブは，150～200のスポーツ教室を持つクラブがある．週１回以上運動するためには，週１回運動することのできるスポーツ教室が必要である．人間，一生同じスポーツをすることは難しい．スポーツ種目をかえる時がくる．総合型地域スポーツクラブがあれば，クラブの中で，スポーツ種目をかえることが容易である．例えば，クラブにクラブハウスがあれば，同じスポーツ教室でない人と一緒に食べたり飲んだりすることができる．その中で人間関係ができてくる．あるスポーツ種目から違うスポーツ種目にかわる時，総合型地域スポーツクラブでなかったら，人間関係づくりをゼロからやり直さなければならない．また，スポーツクラブを辞めていく理由としては「人間関係がうまくいかない」ことが多い[8]．人間関係ができていれば，スポーツ種目をかえることも簡単にでき，40歳代・50歳代男性の地域離れを防ぐことができる．また，小学生・中学生・高校生時代にそのクラブに加入していれば，進学などでいったん外に出たとしても，地元に帰ってくればそのクラブに復帰でき，若者の地域離れを防ぐことができる．これが続けば，三世代のスポーツクラブができる．

2．子どもの健全育成

社会で起こっている各種の教育問題は，子どもたちの人間関係能力やコミュニケーション能力の低下がもたらしたものが多い．子ども時代，これらの能力は遊び集団の中で習得されるものであり，遊びの三つの間（空間，時間，仲間）が保証されない現在においては，昔に比べてこれらの能力が低下している．人間関係能力の中でも，リーダーシップ能力の低下は特に深刻な問題である．10年前，子どもの遊び場面におけるリーダーシップの調査をした結果，遊び場面のリーダーシップ能力は男子の子よりも女子の子の方が高く，リーダーシップ能力の高い子どもの方が学校生活でも高いリーダーシップを発揮している[9]．都市で起こっている学級崩壊の問題を解決するためにも，遊び集団の復活は大切である．しかし，今の子どもたちはこの遊び集団を自分たちで作る能力はなく，大人たちに依存している[10]．

リーダーを養成するためには，異年齢の遊び集団の中で，人に使われた経験，人を使った経験が必要である．年配になってリーダーになっている人は，若い時に人を使った経験のある人である．ＮＨＫの番組「プロジェクトＸ」の中で，第一回南極観測の西森隊長は「人を育てる方法はただ一つ，仕事をさせ成功させることである．成功体験が人を育て，さらに大きな仕事

をする.」と言っている．子どもの遊びは失敗してもいいわけであり，遊び場面での成功体験が子どもを育てる．しかしながら，昔の遊びを作ることは難しく，総合型地域スポーツクラブの中で，「スポーツの遊び化」というプロセスを体験することによってできる．そのためにはスポーツを子どもの手に戻し，子どもたちが企画し，作り上げるスポーツ活動が必要になるであろう．これらの活動を通して，リーダー，サポーター，フォロアーの経験をし，それを学校教育の中に生かしていけば，学校生活や学級経営の改善になり，かなりの教育問題が解決するように思われる．

3．中高齢者の健康づくり

ドイツは福祉国家であり，将来の高齢化に伴う医療費の増大に備えて，1960年，「ゴールデンプラン」を策定した．具体的には，15年間に１兆7000億円の予算を使ってスポーツ施設を建設した．その結果，1950年の地域スポーツクラブ加入率が6.7%であったものが1999年には28.4%になり，現在は30%を越えている．日本でも高齢化に備えて，将来の医療費の削減のためにスポーツ施設を建設し，スポーツクラブを増加させる政策が必要である．愛媛県松山市を例にあげると，松山市の高齢者の占める割合は，2000年15.8%であったものが，2020年には25.3%になる．高齢者一人当たりの医療費は松山市94万円，愛媛県では79万円である．団塊の世代が高齢者の多くを占める2020年になれば松山市の財政は医療費でパンクしてしまう．これを15万円少なくして愛媛県並にすれば194億円安くなる．都市の人口の多さを考えれば馬鹿にならない数字であり，医療費を削減する総合型地域スポーツクラブづくりは緊急を要する課題である．

中高齢者の健康づくりは「コートの外空間」[11]が必要である．中高齢者のスポーツ，例えばゲートボールを観察すると，３時間の活動時間の中で実際に活動している時間は１時間であり，残りの２時間はおしゃべりをしたり，飲み物を飲んだりする「コートの外空間」の時間を過ごしている．ゲートボールをして脈拍が上がらないのに健康になるのはエアロビクス理論では説明できない．なぜ健康になるかというと，「コートの外空間」における良好な人間関係づくりが精神的健康や社会的健康に結びつき，健康になるものと思われる．そのためには，「コートの外空間」を保証するクラブハウスは，特に男性にとって重要である．

4．コミュニティ形成

子どもの健全育成も中高年者の健康づくりも突き詰めればコミュニティづくりにつながる．スポーツクラブによるコミュニティづくりは三つの段階を経て発展していく[12]．個人的レベル→集団的レベル→社会的レベルへのプロセスがそうである．スポーツクラブに加入する個人的レベルの理由としては，健康・体力づくりやストレスの解消があげられ，次に良い仲間ができたという集団的レベルに変わっていく．さらに，メンバーの中から体育指導委員やスポーツ指導員が出てきたり，スポーツクラブ主催のイベントを企画していく社会的レベルまで発展することがコミュニティづくりにつながってくるものと思われる．

しかし，都市のスポーツクラブは集団的レベルで終わってしまうものが多く，都市に多い商業スポーツクラブではこの傾向はもっと顕著である．商業スポーツクラブでは，クラブがプログラム，指導者，施設を用意し，メンバーは金を払ってスポーツや運動を楽しむ．金を出すことを除けば学校体育とあまり変わらない．自分たちでプログラム，指導者，施設を見つけだし，主体的に運営する総合型地域スポーツクラブと違い，これではコミュニティはできない．総合型地域スポーツクラブは，行政に代わって住民のためにスポーツ教室やスポーツイベントを開催する「スポーツの公共性」があり，地域共同体の崩壊から新しいコミュニティづくりのため，総合型地域スポーツクラブの果たす役割は将来的に益々重要になってくるものと思われる．

V　おわりに

日本は，今選択を迫られている．長期にわたる経済的不況や社会的閉塞感を打開するためにアメリカ型の勝ち組と負け組に分かれる競争主義を選択するか，長い歴史や文化のあるドイツに代表される平等主義を取るかである．現在の日本はどうもアメリカ型を志向している．ドイツに２年前に行って感じたことは，経済的に日本ほど豊かではないが，心の豊かさを持っていることである．町の真ん中に教会があり，スーパーマーケットやコンビニエンスショップのかわりに小売店が多い．このことは地域が安定していることである．そして，多世代・多種目のスポーツクラブがどの町にもあり，コミュニティづくりに貢献している．その結果，日本のように，中学校・高校の部活動がなくても学校が維持できている．

日本の将来のことを思うと，長い歴史や文化のある日本はアメリカ型を志向するよりもドイツ型を志向すべきではないか．その意味からも総合型地域スポーツクラブづくりは緊急の課題である．

参考文献

1）愛媛県（2001）「県民のスポーツに関する世論調査」

2）堺賢治・宇野さおり（1996）「子どもの遊びと仲間集団に関する研究ーリーダーシップを中心にー」 第Ⅰ部 愛媛大学教育学部紀要 教育科学 第43巻 第1号 pp. 175-184

3）文部省（1998）「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」

4）谷口勇一（1994）「学校と地域のネットワークつくりに関する調査研究」 第15回みんなのスポーツ全国研究大会 p. 14

5）堺賢治（1996）「スポーツー地域スポーツー」星島一夫・永井鞆江編著「生活文化を拓く」 啓文社 p. 12

6）堺賢治（2001）「40歳代男性のスポーツ活動に関する研究ー地域スポーツを中心にしてー」 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第47巻 第2号 pp. 133-143

7）堺賢治（1995）「スポーツ指導員に関する研究」愛媛大学教育学部保健体育論集 第10号 p. 41-48

8）弓達裕子（2001）「ゲートボール参加者に関する研究」 愛媛大学教育学部保健体育卒業研究

9）堺賢治（1998）「遊び場面におけるリーダーシップに関する研究ー仲間集団や学校生活に及ぼす影響ー」 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第46巻 第2号 pp. 127-134

10）堺賢治（2000）「子どもの遊び集団とリーダーシップに関する研究」 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第45巻 第1号 pp. 131-141

11）荒井貞光（1987）「コートの外より愛をこめ」大修館書店

12）堺賢治（1992）「家庭婦人バレーボールクラブに関する研究ークラブ参加とコミュニティ活動ー」愛媛大学教育学部保健体育論集 第9号 pp. 25-34